
夢幻如也(ユメマボロシノゴトクナリ)

豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメマボロシノゴトクナリ
夢幻如也

【Nコード】

N8933D

【作者名】

豊

【あらすじ】

電車で起きた事件から主人公の人生はあらぬ方向へ動き出す。

毒

他作は理由あつて製作を中止します。

DATAAAN!!!

午前8時、俺　深山悠介の運命は、多分悪い方向に向かって行くことになる事を確信した。

いつも通り、高校への通学に利用していた電車が、高架の橋の所で、突如停車。そして、前方の車両から小さい悲鳴と並みに聞こえた銃声が、7車両目の俺らの所まで聞こえてきた。

もちろん意味がわからず、ただ、単に、前の方に気を向けて、状況を把握したく、車両と車両の接続部に向かう。正直、日本の領土に足が着いている間は銃声など、ドラマ等以外で聞かないと思っていた。

ドアを開けて、前の車両を覗いた。やはりと言うか、前の乗客も前の車両の様子をうかがっている。

（行ってみるか？）

特に野次馬になるタイプでは無いのだが、コレばかりは気になって仕方がない。俺以外にも後ろに乗っていた奴等もいるし。

「お前ら、死にたいんだなあ、じゃあ、お望み通り殺してやるよ？
有り難く思えよな、この孝志様が殺して殺るんだからよ？」

俺が一步進んだ時、前方から、おそらく人だまりになっている、接続部の所から、こちらに聞こえてきた。かなりふざけた口調で言っ

ていた。

前の乗客一人一人が、思い思いの事を口にし、命乞いをするが……
…心無き冷たい銃声が何10発も聞こえてきた。

6車両目の床が、真っ赤な鮮血に染まった。その血を見て笑う右手に銃を持つ男が、満足げにこちらを見た。その目は、殺意に満ちていて、人間の目とはとも思えない。

先程まで微塵も無かった恐怖心が、俺を包み込み、それが、後ろの連中にも伝染する。

（どうすつか…）

いくら考えても、良からぬ想像しか頭に浮かんでこない。

「お前らも死にたいんだよねあ〜？ この孝志様の手で殺されたいんだよねあ〜？」

狂気の殺人犯・孝志が、不敵な笑みを浮かべ続けながら、ゆっくりと、近付いてくる。

俺は焦って踵を翻し、最後尾まで走った。連れて他の乗客も走る。それを嘲笑うかの様に、ゆっくりと、何発も銃声が轟く。

後ろ（7車両目）の方で、悲痛な叫びが聞こえてきた。だが、そんなの今は、気にならない。警察が来るまで逃げなきゃならないのだから。

8車両目を越えて、9車両目に行こうとしたとき、

「止まれ、撃つよ！？」

、と同時に、窓ガラスが割れて、拳銃を2丁持った覆面女が入ってきた。急に入ってこられても、反応できるハズがなく、勢いが止まらないまま、覆面女を押し倒してしまった。

「離して！ 殺すよ！ バカ！ 重いつてば！」

、と罵声を浴びせられたが、足が絡まってしまい動きようがない。
「バカ！ くすぐりたい！ やめ、あはははは、は、動かないで！」
俺が動くと、どうやら女の壺に当たるらしく、悶えている。

にしても、どこかで聞いたことがある声なんだよね……

身近っていうか……ここ最近初めて聞いたっていうか……絶対聞い

たことがあるんだよな。誰だっけか…

「穂香！ 大丈夫か！？ 今そいつ殺るからな！」

背後から孝志がバタバタと足音をたてながら、近付いてくる。そして、銃口を俺の後頭部に押し当てた。

「孝志、落ち着け。時間だ。」

突如、前方から眼鏡をかけて、クールな雰囲気醸し出している男が、それに合う落ち着いた声で言った。まさに神様だと俺は思った。だが、服装と装備を見て、その思いは、瞬く間に消え去った。

迷彩服を着て、ウージーのマガジンを迷彩服の至る所に備え、腰には拳銃を4丁、背中にはライフルの重装備振りだ。

今時の日本でこんな奴がいるなんて珍しいな……って、感動している場合じゃねえや！

俺は絡まっていた足が、いつの間にか外れていたので、慌てて立ち上がろうとした。

「痛っ！」

……まあ、太ももの上の方、だいたいパンティの真下辺りを引っ掻いてしまった。

「こいつっ！ 俺の穂香を傷付けたな！ 許さねえ！」

何故か怒りの表情で立ち上がった俺に銃口を向ける孝志。

「私は孝志のモノじゃないよっ！」

すかさず否定。

「そんなあゝ！ ……うう……酷い……」

瞬時にへこむ。かなりマジでへこんでいる様子だ。まるでコントだな。

「退くぞ。時間がない。」

クールな男がそう言うのと、2人を両手で軽々と持ち上げ、割れている窓から忍者みたく跳び去った。

いったいなんだったのだろうか……とりあえず高校に行かなくては。大幅な遅刻だし……まあ、元々遅刻だったんだけどね。

学校に着いて職員室にいつて、担任に軽く怒鳴られてから、教室に向かった。かなりうるさい。時刻は…まだ12時前か、丁度お腹が減って、集中力が無になっている時間だ。どうりでうるさい訳だ。後ろのドアを開けて、堂々と入る。みんなの視線がこちらに向けられる。

……結構こういうのって恥ずかしいんだよな。

とりあえず俺の席に向かってみる。途中友人Aと友人Bに弄られたが、もちろん無視。

席について、俺は机に伏せた。さっきの緊張感というか緊迫感みたいなのが、疲労感に変わって、俺の体を重くする。

俺は気まぐれに右を向いた。隣の席の奴は…いない。隣の奴誰だっ

……け………か………？

こんにちはゝそしてこんばんはゝ

豊です。

さて、初回から中途半端な終わり方でしたが、これはまあ、一つの遣り方なので気にしないで下さい。

ちなみに本作品は、アクション＋恋愛＋ホラーで形成されて行く予定です。

豊の得意分野はホラーのみなんですが、それだけではダメだと思い、最近は恋愛を書いてます。

恋愛シナリオは明らかに他著者様に劣りますが、それをホラー＋アクションでカバーしていきたいと思ってます（あ

拙い文章ですが、暇潰し程度に読んで下されば、嬉しいです。

最後に、誤字脱字の指摘や感想など待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8933d/>

夢幻如也(ユメマボロシノゴトクナリ)

2010年10月10日01時13分発行